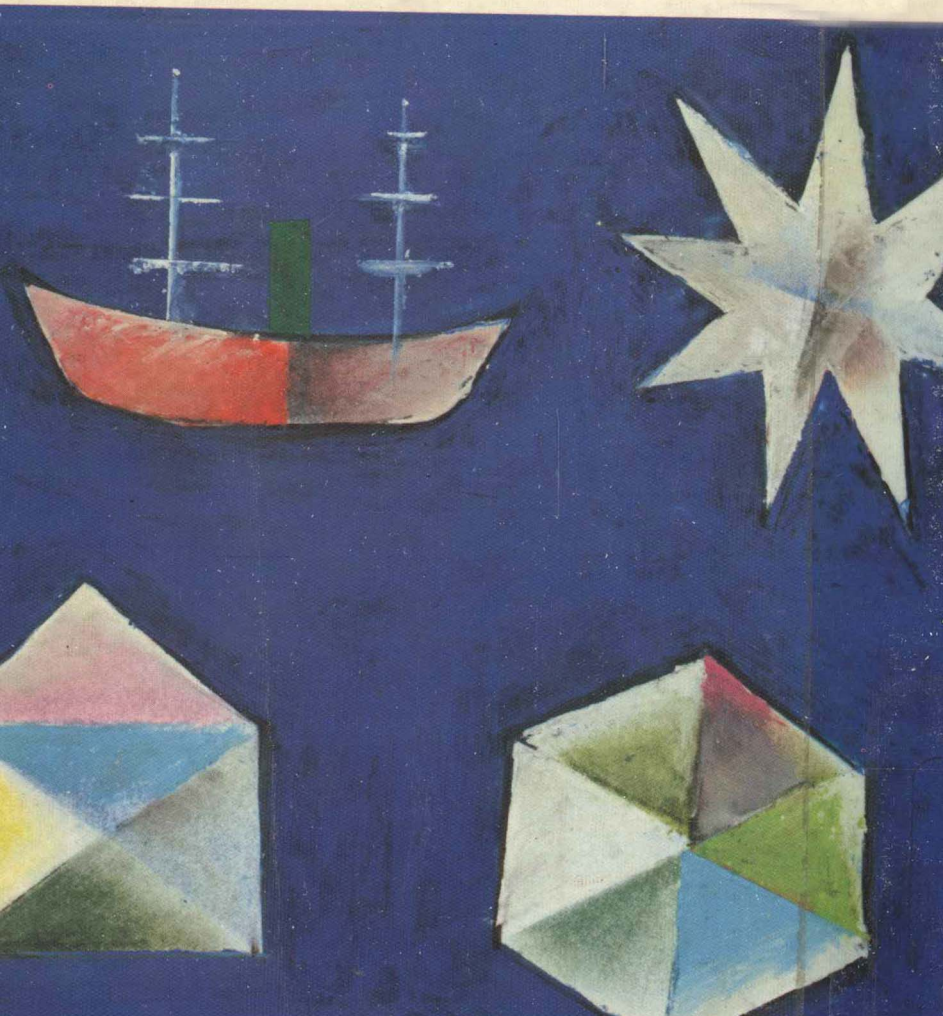
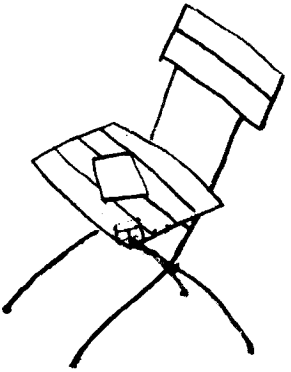
鎮魂歌

佐藤愛子



鎮魂歌

佐藤愛子



文藝春秋

著者略歴
大正12年大阪市に生る。兵庫県甲南高女卒。
第61回直木賞受賞。受賞作は「戦いすんで日が暮れて」

著作目録

「愛子」	昭和34年3月	現代社
「ソクラテスの妻」	〃 38年9月	光風社
「花はくれない」	〃 42年12月	講談社
「さて男性諸君」	〃 43年11月	立風書房
「戦いすんで日が暮れて」	〃 44年4月	講談社
「加納大尉夫人」	〃 44年9月	講談社
「忙しいダンディ」	〃 44年12月	講談社
「ああ戦友」	〃 44年12月	文藝春秋
「三十点の女房」	〃 45年5月	講談社
「おしゃれ失格」	〃 45年6月	みゆき書房
「赤い夕日に照らされて」	〃 45年10月	講談社
「愛子の小さな冒険」	〃 46年4月	文藝春秋
「天気晴朗なれど」	〃 46年5月	読売新聞社
「ああ戦いの最中に」	〃 46年6月	講談社
「九回裏」	〃 46年8月	文藝春秋
「その時がきた」	〃 46年11月	中央公論社
「躁鬱旅行」	〃 47年1月	光文社

鎮魂歌

昭和四十七年七月二十五日　第一刷

定価　五〇〇円

著者　佐藤愛子

発行者　樫原雅春

発行所　株式会社　文藝春秋
〒102
東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五局一二一一

印刷　図書印刷
製本　加藤製本

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

© 1972 Aiko Sato　　Printed in Japan

0093—302500—7384

鎮魂歌

裝幀　風間完

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

私たちはゆるやかな坂道を歩いていた。坂道は舗装されていたが、ところどころ舗装が破損して、そこに昨夜の雨水が溜っていた。

私たちは作家の足立五郎の家からの帰りだった。私は土田良子と並び、私たちのすぐ前を天野勇と伊藤芳吉が歩いていた。そしてその二人の前を、珠夫はひとりで歩いていた。

私は珠夫の左足に気がついた。珠夫は左足だけ踵(かかと)が高くなっている靴を穿いていた。そ

の靴を穿いている左脚は、彼の一歩ごとに微かにひきずり、その都度珠夫の肩は左にかしいだ。

冬のはじめの夕日が、右側から坂を照らしていた。坂の右側は戦争で焼けた住宅のあとがまだそのままになっていた。その焼跡に生い茂った雑草は、生い茂ったままうす茶色に枯れていた。

その向うに坂の下の町が見えた。坂の下の町も冬の夕焼の下で光っていた。左に倒れている珠夫の影法師が、伊藤芳吉や天野勇と違う動き方をするのを私は見た。

見てはならぬものを見てしまった時のように、私はすぐ、目を逸らした。それが私が珠夫と知り合った最初の日だった。

冬のさなか、私たちは珠夫の家へ行った。そのときも土田良子と天野勇と伊藤芳吉がいた。その他にも一人、二人、誰かいたようにも思う。私たちは皆、売れない小説を書いていた。

珠夫の部屋の東南に切った大きな窓からは広い庭が見渡せた。庭は私たちを驚かせるのに十分な広さだった。ズボンのお尻にアイロンの形そのままの焦跡をつけている珠夫が、こんな大邸宅の息子だとは思わなかった。庭は芝生の部分と築山の部分と南下りの渓流の

部分のほかに、二棟の温室の屋根が見えた。

その庭を背にして珠夫は足を踏み広げ、バイオリンを弾いた。短い方の左足は、踵が床に着かずに絶えず小刻みに慄えていた。彼のバイオリンの音色は抒情的でメランコリックだった。そして珠夫はそれに酔っていた。彼が酔って弾いていることが、私たちをも酔わせた。そのメランコリイは甘かった。私たちはみな、二十代で若かった。

そのとき、私は、自分が跛(びっこ)でないということで、彼にひけ目を抱いた。

第一章

1

こんな状態になるずっと前から、親子三人が揃って食卓を囲むことなど、何年もなかったといってよかった。夕飯のときに珠夫がいないのが普通で、たまにいると、

「パパ、どうしたの？　病気？」

と美子は聞いた。

だから、珠夫が家から出ていっても、急にこの家が淋しくなるということはなかった。

一家の主がいなくなったというのに、私の家には何の変化もないのだ。実際驚くべく、変化がない。

珠夫の書斎はそのままで、書きもの机の上のものも何ひとつ変らなかった。ガラスのインキ壺のインキは珠夫がこの家にいた時から乾いて、薄く埃がたまっていた。ペン皿の中の二本のペンや文鎮も薄い埃をかぶっていたが、それも珠夫が家にいた頃からのことだった。珠夫はその二、三年、書きもの机に向ってものを書くことなどしなくなっていたのだ。書斎に坐っていたことさえない。家政婦は珠夫の部屋の掃除の手を抜くようになっていた。けれどもさすがに、私たちは珠夫が家にいる間は、その部屋に不用なものを入れるようなことはしなかった。珠夫がいなくなると私はダンボールの箱をそこに入れた。その中には美子の、もはや小さくなった洋服や靴が入っている。捨てるのが勿体ないので、私はそうしておいて、誰かにあげるつもりをしている。そのうちに私は季節が過ぎたので、物置へしまわなければならない数枚の網戸を置いた。それは夏の間に物置に溜った不用のものを片づけるまでの、臨時の処置のつもりだった。だが網戸は結局ずーっとそこに置かれることになった。家政婦は当り前のように古雑誌をその部屋に積んだ。私たちは珠夫の書斎を物置化することに馴れた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

私と珠夫は長い間、売れない小説を書いている「奇妙な夫婦」だった。私たち自身は奇妙とは思わなかったが、私たちを見る人はよくそういった。それは私たちが何の職もなく一文の収入もないくせに大きな家に住み、来る日も来る日も夫婦してせっせと原稿用紙を無駄にしていることを指していったものだったろう。およそ十年かかって私たちは幾つもの会社の社長や会長をしていた亡父からの遺産を使い果した。そんな生活も人の目には思慮の足りない暮し方に見えたことだろう。

遺産を使い果したので珠夫は事業をはじめた。何かやらなければ、間もなく私たちは食べて行けなくなることがわかっていたからだ。（そのことは私にはまだわかっていなかったが）たまたま現れた知人に勧められて珠夫は出版事業を始めた。そして失敗した。

私たちの不幸は（あるいは倖せはという言葉でもいえる）長い間お金になることがなかった私の小説がその頃から売れるようになったということである。珠夫の事業の失敗と私の小説が売れはじめたことは殆ど同時に起った。それまで一文の収入もなく、しかし金持だということになっていた私の一家は、破産して一文なしになると同時に、私の働きによって収入が入って来ることになったのだ。私の収入をもとにして、珠夫はまた新しい事業をはじめていた。

「暫くの間、うちを出て、一人で暮してみようと思うんだ」
ある日珠夫はそういった。
「ぼくは今、書きたいんだよ。とにかく書き出さなくちゃいかんと思うんだ。今のこの時期に書かなかったら、ぼくはもう永久に書かなくなってしまうような気がする」
私は珠夫から顔を背けて、窓の上の方に広がっている秋空を見ていた。おそらく私は無表情だったろう。その頃から私は不愉快なことがあると無表情を作るようになっていた。
「ぼくの最後の我儘を許して欲しいんだ。とにかく一作書き上げて、それを持って帰って来るよ。二、三ヵ月あれば書けると思うんだ」
「そう」
私は怒りを押えていった。
「ならそうすればいいじゃないの」
「ぼくは事業の面で名誉挽回しようとした。だが一年やってみて、不可能だということがわかったんだ。ぼくは今、社長じゃない。社長は嵐君だ。ぼくの顔で会社に仕事が来ているといったところでぼくはあくまで蔭の存在だ。会社がよくなったとしてもぼくとは関係ないんだ」

そして暫く黙っていてから、珠夫はいった。
「ぼくの住む所じゃないんだ。事業の世界は……それがはっきりわかったよ」
珠夫は情熱的に私を見つめていった。
「ぼくは文学で復活するよ。それよりほかにぼくの生きる所はないんだ。それがわかったんだ」
「わかったわ、そうすればいいわ」
私はおとなしくいった。そういうとき私の怒りは萎えていた。
珠夫には超能力の人のような〝癒す力〟がある。私は珠夫に傷つけられ、いつも彼によって癒された。それはずーっとそうだった。彼が私を見つめ、「いいかい郁、よくお聞きよ」といい出すと、私の心は次の言葉を受け入れるために、はや柔かくなるのだった。
「いいかい、郁、わかる？　わからないかな？」
そういう時の珠夫の真面目な悲しそうな顔を見ると、そこに私の我儘が写し出されているような気がして私は萎えるのだった。
珠夫は普通の男とどこか違っていた。普通の男なら怒るところを珠夫は怒らなかった。なぜ怒らないのかと詰問するたびに彼は、

「だって腹が立たないんだものなあ」
と途方に暮れたようにいうのだった。珠夫はまた、損をすることを何とも思わなかった。いや、損をすることが好きでさえあった。人を信じていつも欺されていた。
そんな珠夫に腹を立てて、私は牛乳瓶を投げつけたり、天野勇や伊藤芳吉のところへ珠夫の悪口をいいに走って行った。しかし私は彼らが珠夫の批判をはじめると彼らを「俗物」だと思うのだった。もしかしたら珠夫が人に欺されたり、損をしたりすることは私の〝好み〟に合っていたのかもしれない。珠夫のそんな所が好きだったのかもしれない。人に（株屋や不動産屋や金に困っている文学青年くずれや）欺されて、損をするたびに私は怒り狂ったが、怒りが鎮まるとそんな自分を醜いと思うのだった。よく考えてみると私の方にだって正当性はあったのだ。妻の立場としての正当性が。人に迷惑をかけず、損をせず、現実の中でしっかりと生きて行くための正当性が。私はその正当性を掲げて珠夫に対抗するべきだったのだ。だが私はすぐに我を忘れた。私はただ怒りのタツマキに身を任せた。私は怒りのもの凄さによって我と我が正当性を踏み消してしまった。誰もが珠夫に同情した。そして私自身、怒りの渦の中で掲げるべき正当性を見失った。一つの怒りが次の怒りを呼び、その爆発がまた次の爆発を誘い出す。私は自分が怒り出した理由を忘れて、ただ

激動する感情に溺れた。そうして漸く怒りが燃え尽きた時、呵責が私をおとなしくした。人を罵り、暴れ、傷つけたという呵責が。その結果、私はいつも珠夫に譲歩してしまった。

冬のように暗くて寒い秋の夕暮、珠夫は慌しく外から入って来ていった。

「車の都合がいいんで今日から行くことにしたよ」

私は机の前から立ち上った。私は朝も昼も夜も机の前にいて万年筆を握っている。私は整理箪笥のひき出しからワイシャツや靴下を出してトランクに詰めた。

「少しでいいよ。そんなにいらない。少しでいいんだ。すぐに戻って来るんだから」

珠夫は荷作りをする私の手許に向ってくり返した。私はいった。

「夕飯は？」

私は怒りで声が慄えるのを押し隠した。珠夫のやり口はすべて、いつもこうだ。

「いらないよ。外で食べる。車が待っているから」

彼は布団包みを担いで階段を下り、

「おーい」

と表の運転手を呼んだ。

私は呆然と立ってそれを眺めていた。彼は運転手に布団包みを渡し、自分はトランクを

担いだ。

「じゃ、また」

彼はいった。彼はにこにこ顔で私を見て、いつもするように肯いた。彼が玄関のドアーを閉めたとき、突然私は火になった。追いかけて行って彼をうちのめしたい衝動を私はこらえた。怒りの焔にくるまれつつ、私がそれに堪えたのははじめてだった。だがなぜそのとき私が堪えたのか、私にはわからない。

2

それから半年経った。

しかし私は珠夫の住んでいるアパートが、東横沿線にあること以外には何も知らなかった。私は珠夫が置いて行った住所のメモを、どこかへ置き忘れた。私はとりたててそれを探そうとしなかったが、それは珠夫に対する反発であったかもしれない。

珠夫は一週間に一度か二度、家へ帰って来た。珠夫は玄関の鍵を持っていたので、深夜、思いがけないような時間に入って来ることもあった。しかし午前三時四時というそんな時

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com